

「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」

40年間、ミデアンの地で、神の訓練を受けることになったモーセが80歳になった時、彼はイスラエルの民をエジプトから脱出させるリーダーになりました。神様はモーセが知力、体力共にピークの時にモーセを用いることなく、神様はモーセが80歳を過ぎてからお用いになりました。

なぜでしょうか。モーセが40歳の時、イスラエルの民を荒野で導くために彼にはまだ足りないものがありました。その時、モーセ本人はそんなことは何も知らずに、「今こそ！」という思いで、勇み立ちましたが挫折しました。神様の計画は彼のそれとは異なっていたからです。その時のことを使徒行伝は「彼は自分の手によって神が兄弟たちを救って下さることを、みんなが悟るものと思っていたが、実際はそれを悟らなかったのである」（使徒行伝7章23節-25節）と記していますが、この言葉はあたかも「神を自分の願いを実現するサーバント」のように考えているモーセの心が見えます。それは大きな間違いで、神こそがモーセの主であり、モーセは主の恵みとあわれみにより生かされている一人の弱い人間にすぎなかったのです。

こうしてモーセは40年間、ミデアンの荒野に暮らし、その齢80歳となりました時に、神は彼にイスラエルの民をエジプトから救い出すようにと声をかけ、いよいよ彼は民を荒野に導く、その先頭に立つリーダーとなりました。しかし、それは彼が完全な人間になったということではありませんでした。彼らがエジプトを出て、荒野を移動しながら生活をしていた時にこんなことが起こりました。

1 イスラエルの人々の全会衆は正月になってチンの荒野にはいった。そして民はカデシにとどまったが、ミリアムがそこで死んだので、彼女をそこに葬った。2 そのころ会衆は水が得られなかったため、相集まってモーセとアロンに迫った。3 すなわち民はモーセと争って言った、「さきにわれわれの兄弟たちが主の前に死んだ時、われわれも死んでいたらよかったものを。4 なぜ、あなたがたは主の会衆をこの荒野に導いて、われわれと、われわれの家畜とを、ここで死なせようとするのですか。5 どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水也没有せん」。6 そこでモーセとアロンは会衆の前を去り、会見の幕屋の入口へ行ってひれ伏した。すると主の栄光が彼らに現れ、7 主はモーセに言われた、8 「あなたは、つえをとり、あなたの兄弟アロンと共に会衆を集め、その目の前で岩に命じて水を出させなさい。こうしてあなたは彼らのために岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませなさい」。9 モーセは命じられたように主の前にあるつえを取った。10 モーセはアロンと共に会衆を岩の前に集めて彼らに言った、「そむく人たちよ、聞きなさい。われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならないのであろうか」。11 モーセは手をあげ、つえで岩を二度打つと、水がたくさんわき出たので、会

2017年1月22日 「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」

衆とその家畜はともに飲んだ。12 そのとき主はモーセとアロンに言われた、「あなたがたはわたしを信じないで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかったから、この会衆をわたしが彼らに与えた地に導き入れることができないであろう」。13 これがメリバの水であって、イスラエルの人々はここで主と争ったが、主は自分の聖なることを彼らのうちに現された（民数記20章1節－13節）。

今日、開かれている民数記はモーセの失敗が書かれている箇所です。そして、その失敗がいつ起きたかといいますと、モーセの人生の後半、どちらかといいますと、その晩年に近い時に起きたことと思われまます。

先週、お話ししましたようにモーセはミデアンの荒野で神様の前に取り扱われて、主に自らを委ねることを学びました。それをもって、あのエジプトのパロを前に動ずることなく向かい合い、数百万ものイスラエルの民の先頭に立ち、幾度も民達のつぶやきと不満を受けながらも、己を捨てて彼らのために神に取り成し、ここまでやってきました。それはあのミデアンの40年間で培ったものでありましよう。

民数記12章3節に記されているように「モーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」というモーセのキャラクターはそんなミデアンの荒野で培われたものだったのでしょうか。しかし、そんなモーセがここで犯してしまった失敗は、彼が他の人よりも一番、秀でていたと言われた柔和さが揺り動かされることによって起きてしまったのです。

事の背景を簡単にご説明しましょう。イスラエルの民がチンの荒野、ガデシという所に来たということが一節には書かれています。そして、その所でモーセの姉のミリアムが死にました。ミリアムと言えば、モーセがまだ赤子だった頃に知恵を働かせて彼の命を救った人であり、その姉をそこに葬ったというのです。彼女はモーセにとっては命の恩人であり、荒野の旅路においても彼女はモーセを励ますとても大切な肉親だったと思います。愛する家族を失った者が誰しも感じるように、彼も当然、深い悲しみの中にいたと思います。そんな時はしばし静かな時を過ごしたいと誰もが思います。喪失の悲しみに対する向き合い方に民族や時代の違いはありませんでしょう。

しかし、イスラエルの民達にはそんなことは関係のないことでした。彼らはその場所で水を得られなかったために、モーセが直面している悲しみなどおかないなし、いつものごとくモーセにけしかけるように言ったのです。「先にわれわれの兄弟たちが主の前に死んだ時、われわれも死んでいたらよかったものを。なぜ、あなたがたは主の会衆をこの荒野に導いて、われわれと、われわれの家畜とを、ここで死なせようとするのですか。どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、い

2017年1月22日 「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」
ちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水也没有せん」（3-5）

彼らをエジプトの奴隷状態から救い出して、ここまで来たのに、また、ここにきて、なぜエジプトから我々を導いたのかと不平不満を聞かされる。ここには何も無い！この荒野で俺たちを殺す気か！という言葉はモーセの心に突き刺さりしました。モーセにとりましてこのような言葉は初めて聞く言葉ではありません。ここにいたるまで何度もモーセが聞いてきた言葉です。そして聖書が記しているように類まれな柔和さをもってモーセは忍耐をもってこの民に向き合ってきたのです。

皆さん、モーセの最初の挫折を覚えていますか。そうです、その時、同胞達は神が彼らを救うために自分を送られたのだと彼らは悟るだろうとモーセは思ったのです。しかし、その目論見は外れました。自分の目論見と彼らの考えは異なりました。この時もモーセは親愛なる姉が亡くなったのだから、今、自分が置かれている状況を民は理解し、少なくとも喪に服しているような時に、こんなことを言うてくることはないだろうと思っていたのかもかもしれません。しかし、彼らはそんなモーセの心に土足で踏み入り、いつものように不平、不満をぶちまけました。

いつも聞いている言葉であり、その度にそれを受け止めて対処できる人であっても、その時に同時進行でその身に起きていること次第で、心の余裕というものも失われます。モーセとて人間、例外ではありませんでした。しかし、そのような状況の中、彼はこんな時に、いつもそうしているように会衆の前を去り、神様のみ前にひれ伏したのです。そうです、そのまま会衆の前にいるのなら、モーセは何を言い出してしまうか、何をしでかしてしまうか分かりません。そんな時、あえて会衆の前から去るということはモーセがこれまでも同じような場面で会得した精一杯の自らを守る防御策だったのでしょう。

モーセは会見の幕屋の入り口でひれ伏して神の前にでました。その時、主の栄光がモーセに現れ、主は言われました「あなたは、つえをとり、あなたの兄弟アロンと共に会衆を集め、その目の前で岩に命じて水を出させなさい。こうしてあなたは彼らのために、岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませなさい」（8）。

モーセは神の前に静まることによって、「そうだ冷静さを忘れてはならないのだ。神に言われたとおりにしよう」と決心したに違いありません。しかし、彼は実際に会衆を前にした時に、こう叫んだのです「そむく人達よ、聞きなさい。我々があなたがたのためにこの岩から水を出さなければならぬのであろうか」（10）。そして、彼は手を挙げて持っていた杖で岩を二度打ったのです。すると、そこから水が湧き出しました。そして、結果的にその水により会衆と家畜は満たされたのです。

ここに大きな問題がありました。モーセラしからぬ問題です。神様はモーセに「岩に命じて水を出させなさい」と言ったのです。しかし、彼は岩を二度打った

2017年1月22日 「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」
のです。そして、それはどうやら岩をコンコンと軽くたたいたということではなく、「手をあげて」とあるように、思い切り杖を振り上げて、杖が折れんばかりに岩を叩いたようです。明らかに彼の感情は激しく荒れていました。

このことは神様がモーセに伝えたことと違います。なぜ、彼はこのような行動に出たのでしょうか。想像しますにモーセがアロンと共に会衆を岩の前に集めていた時に（10）、彼は再び会衆の不平不満の声をいくつも聞いたのでしょうか。彼らの反抗的な態度というのを再度、間近に見たのでしょうか。モーセ自身、敬愛する姉を亡くし、心身ともに疲労困憊している。そのような状況で自らの心を冷静に保つことは至難の業です。

岩に命じるべきだということはモーセも十分に知っていました。しかし、もはや彼は心の底から湧き上がってくる感情を抑えることはできませんでした。彼は叫んで言いました「そむく者達よ、聞け、なぜ我々がお前たちのような者のために、この岩から水を出さなければならないのか！！」。

彼の心にはこんな思いがありました「いいか、お前たち、またもやお前たちは、不平不満を言ってきた。そして、それは今日に始まったことではない！いつもいつも、お前たちはそうではないか。何も変わらないではないか。私はどれだけあなたたちのためにこれまで骨折ってきたのか分かっているのか。私には姉の死を静かに悲しむ時もないのか。お前たちのために何で私がこの岩から水を出さなければならないのか。もう真っ平御免だ！」。

そうです、彼は積もりに積もったものをぶちまけました。彼の冷めやらぬ怒りに対して、神様は厳粛に言われました「あなたがたは私を信じないで、イスラエルの人々の前に私の聖なることを現さなかったから、この会衆をわたしが彼らに与えた地に導き入れることができないであろう」（民数記20章12節）

この神様の一言はとても重いものです。モーセのこの一つの不信仰と怒りが、彼がここまで歩んできた目的であり、ゴールであり、彼の報いとして神様から与えられるはずだった約束の地に彼は入ることができないという結果を招いたのです。すなわち、彼は夢にまで見た約束の地に入る前にその生涯を閉じるということです。そして、実際に彼の生涯はそうなったと聖書は記録しています。

皆さん、この出来事を聞いてどう思われます「なんと厳しいのだろう」と思われますか。「いいじゃない、見逃してくれたって」と思われますか。この出来事は私たちにどんなメッセージを残しているのでしょうか。

この出来事について詩篇106篇32節―33節で、その記者はこんな視点でこう書いています「彼らはまたメリバの水のほとりで主を怒らせたので、モーセは彼らのために災いにあった。これは彼らが神の霊にそむいた時、彼がそのくちびるで軽率なことを言ったからである」ここには、今見てきた出来事は「モーセが

2017年1月22日 「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」

その口で軽率なことを言ったからだ」と説明しています。すなわち、それは私たちの口から出る不用意な一言で人生全てがひっくりかえってしまうということです。

ここから分かることは神様は少なくとも私達が考える以上に、私達の口から出る言葉に注目しておられるということではないでしょうか。その言葉がどんなにその人を引き下げ、それを聞く者達の害となり、その状況に悪しき影響を与えるかということをお神様はよく知っておられるのです。

モーセの失敗は確かに私たちに大きな教訓を与えてくれるものです。私達自身のことを思えば、諸々の日常の心配事やストレス、日々なすべきことに忙殺される時、私達は心の余裕を失います。その時こそ私達が自らの感情をあらわにし、それを実際に口に出してしまう時です。モーセがそうであったようにそれは誰よりも柔和であると言われるような人であっても例外ではないのです。誰もその可能性をもって生きています。

私達は彼の気持ちを理解します。彼に深く同情します。私達もモーセと何ら変わらない者だからです。しかし、神様はこのことをしてモーセが約束の地に入るといふ扉を閉じられたのです。その時にモーセに必要なことは何だったのか、考えてみました。そう、ひとつの言葉だけが思い浮かびます。そうです。「忍耐」です。モーセの気持ちは本当に分かります。誰も堪忍袋の緒が切れる時があるのですから。しかし、それであっても神様のモーセに対する対応を見る時に、神様は私達に忍耐を求めておられるということを知るのである。忍耐という言葉は現在、死語となっているような言葉です。耐えるのではなく、言いたいことは言えはいという、言わなきゃ損という風潮に私達は生きています。しかし、聖書はこの「忍耐」を私達にとりまして特別なものとして、そこに光をあて続けています。

35 だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。36 神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。37 「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。38 わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。39 しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。(ヘブル10：35－39)

このヘブル書の記者は大変な試練に会っていたようです。そんな自分に降りかかってくる度重なる試練に対して、私達に必要なのは忍耐だと言うのです。その忍耐はただ耐えて耐えて生きなさいというのではなくて、その忍耐を知っておられるお方がいて、そのことを耐えていく先にその方が備えておられる約束のものがあるのだから、その信仰の確信を放棄せずに忍耐をもって前に進みなさいということです。

2017年1月22日 「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」

そもそも忍耐はなぜ私達に必要なのでしょうか。忍耐は何かが続いている時、継続されている時に用いるものです。野球の練習を始める。目標はレギュラーとなってゲームに勝つこと。そのためには長い年月の練習が不可欠です。目指すべきところがあり、そこにいたるためには厳しい練習が不可欠ですから、私達はその目標に達することを信じて、厳しい練習に忍耐して取り組むのです。すぐに手に入り、すぐに結果が分かることに忍耐は必要ありません。コインを自動販売機に入れて、ジュースが出てくる数秒間、私は忍耐してコーラを待ちましたとは言いません。数分おきに必ずやってくる山の手線を忍耐をもって待っていますという人はいません。どちらもすぐに手に届くからです。

何度も申し上げておりますように、人生は今、完結するものではなく、それは長いのです。ですから私達に必要なのは忍耐です。ストレスはいつ私達に降りかかってくるかご存知ですか。自分が願っているとおりには物事が進まない時に起こります。自分の願っていることの前に立ち足るものがある時に、その計画がとん挫したり、無効になった時に、私達はストレスを感じます。そう、モーセもそうでした。身内を失った悲しみの中、人は必ず死ぬものであるという現実を前にしばし静まりたい、そう願っているただ中に、それをぶち壊す者が侵入してくる。彼はそこにとてつもないストレスを感じたのです。

誰もがストレスを抱えて生きています。時にこのストレスは私達の口から苦々しい言葉となって辺りにまき散らされます。自分で心に貯めているストレスは嫌なものでしょう。その本人が嫌なものが言葉や態度となって外にまき散らされるのなら、それを見聞きする者も同じようにそのことを聞くのは、見るのは嫌なのです。それを見聞きする人達は時に、その人と全く関係のない人であることも多々あり、そう考えますのならその苦々しい言葉や態度が発散される場に居合わせている者たちは皆、犠牲者です。さらに困ったことは、我々は自分がまき散らしているものが、それを見聞きするものにとってどんなに不快な思いを与えているのかということにはなかなか気がつかないのです。

主にある兄弟姉妹、私達に必要なのは忍耐です。このようなことを聞きますと私達は手のひらに「忍」という字を書いて、耐え難き時はそれを握り締めるといような処世訓としてこれを受け止めがちですが、聖書が言っていることはそのようなことではないのです。そうです、我々の「忍耐」は常に我々の「信仰」と同居しているのです。『ですから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけません。その確信には大きな報いが伴っているのです。36 神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐なのです』（ヘブル10：35－36）信仰なくして忍耐は生まれません。忍耐する根拠は私達が信じている確信にあるのです。

先ほど読みましたヘブル書を書いたのはパウロではありませんが、そのヘブル書にそのまま続けても全く違和感のないような言葉をパウロはローマ書に残しています。

1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。3 それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、4 忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。5 そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである（ローマ5章1節－5節）。

私達が諸々の患難に会う時に、そこから忍耐が生まれるとパウロは言います。そして、その忍耐が錬達を生み、それが希望となると。このことを新改訳聖書はこう記しています「そればかりではなく患難さえも喜んでいます。それは患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」そう、私達が主の作品としてその品性、すなわちその人格を完成させるものは忍耐なのだというのです。そしてその人格が希望を生み出すというのです。そうです、忍耐は私達に何層も何層も塗られる漆のようなものです。それはすぐに剥がれてしまうようなメッキではなく、私達の人格を作り上げるものだというのです。

齢をとってきたからでしょうか。人の美しさというのは表向きだけの美しさではなく、その人がどれだけ忍耐をして生きてきたかというようなところからにじみ出てくるのではないかと思うようになりました。

年末に日本の『のどじまん THE ワールド!2016 春』というテレビ番組を見ました。これは毎年、もたれている外国人が日本の歌を日本語で歌うコンテストで、世界中から予選を勝ち抜いてきた人達が集まります。今回の大会ではその中にキルギス共和国からきたグルム・カシムバエヴァさんという全盲の方がおりました。予選で竹内まりやの「元気を出して」、決勝で夏川りみ「涙そうそう」を歌い、優勝しました。この歌番組のレベルは高く、その中から過去にはプロとなるような人が出ています。歌のみならず、ダンスなども取り入れて、彼らは熱唱します。それを日本のミュージシャンや音楽プロデューサーが採点をします。

このグルムさんは目が見えませんが、自らが歌う場所までも人に手を引かれて出てきます。そして、握っているマイクを口にあてて心を込めて歌います。彼女が生まれつきの盲人なのか、過去に目が見えなくなったのかは分かりません。ただ分かることは彼女は鏡の前に立ち、お化粧をしたり、身なりを自分で整えることはできないということです。

私はそんな彼女の姿を見ながら、自分をうまく見せようというような気負いが全くないということがすぐに分かりました。彼女は全くの自然体で歌いました。彼

2017年1月22日 「モーセ3：忍耐が品性を生み出す」

女がどんな生涯を歩んできたのかということは、彼女が二児の幼子の母親であり、全盲であるということ以外には分かりません。

彼女が出てくるまでに歌がうまい人がたくさんいました。しかし、その中で私は特に彼女の姿と歌に感動しました。もちろん彼女も歌がうまいのですが、何も聞かされずとも、その人自身の半生がその歌声から私に伝わってきたからだと思います。再度、申し上げますが、私は彼女の人生をほとんど何も知りません。しかし、思うに私はその彼女の人生において彼女が忍んできたこと、それを克服し、否、今もその直面していることに忍耐強く向き合っている姿を見出し、それが彼女からにじみ出てきているものに感動したのではないかと思ったのです。

大抵、人がどれだけの忍耐をもって生きているかということは私達には知り得ません。しかし、その人の中に美しい何かを見出すのなら、その根っこにはその人が人生の諸々のチャレンジにどれだけ忍耐し、神を信じ見上げ、それを乗り越えてきたのかということにたどりつくのではないのでしょうか。ゆえに聖書もあなたの「実力」がとか、あなたの「繁栄」があなたの「品性」を生み出すとは言わずに、あなたの「忍耐」が「品性」を生み出すと言ったのではないのでしょうか。私達の心に感動を引き起こすものは、そのことの背後にある「忍耐」と「信仰」なのです。人格の集大成とは私達の人生の集大成であり、それは忍耐と信仰の集大成のことをいうのです。そして、人格こそが最後まで残るものであり、それだけは天国に携えていくことができるものなのです。

それであっても私達はこのことにおいて毎日、チャレンジを受ける者です。そして、モーセと同じように失敗を犯す者です。もし、私達が失敗を犯してしまったら、私達は主の前に自らを深く省みましょう。それをそのままにしたり、どうせ無理なのだというようにしてあきらめてしまうのではなくて、主の前に出ましょう。モーセはこの失敗でその人生が終わったのではありません。His life continues! 彼はここで再び神に取りあつかわれて、その器が整えられていったのです。価値あるものができあがるためには時間がかかります。主の御手の中、私達も日ごとに作り変えられてまいりましょう。お祈りしましょう。